杉浦明平記録文学選集 4

杉浦明平
記録文学選集

4

わたしは町議会委員長
視察旅行
地方議員の涙と笑い

読売新聞社

杉浦明平（すぎうらみんぺい）

作家・文芸評論家。大正二年愛知県渥美郡福江町（現在は渥美町）生まれ。東大国文科卒。同大学院に在学中、東京外語大でイタリア語を学び、ルネッサンス文学を研究、社史編纂、雑誌編集等の仕事に就く。敗戦後は故郷で文筆業に専念。かたわら、昭和二十四年日本共産党入党、約十年間在籍し、二十七年には福江町教育委員、三十年から三十八年まで渥美町町議会議員として活躍した。現在新日本文学会会員。代表作に「椿園記」「小説　渡辺崋山」がある。現住所　愛知県渥美郡渥美町折立

杉浦明平記録文学選集　4　全4巻

わたしは町議会委員長　ほか

昭和四十七年三月二十日　第一刷
昭和四十八年五月十五日　第二刷

著者＝杉浦明平

発行者＝松田延夫

発行所＝読売新聞社
〒100 東京都千代田区大手町一―七―一
〒530 大阪市北区野崎町七七
〒802 北九州市小倉区明和町一―一一

印刷＝大日本印刷株式会社

製本＝協和製本株式会社

定価　八五〇円

©, Minpei Sugiura, 1972

0393-205140-8715

第四巻　目次

わたしは町議会委員長・　3
視察旅行　269
地方議員の涙と笑い　311
あとがき　431
解説　関根弘　434
単行本年譜　440

装丁　水谷　勇夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わたしは町議会委員長

赤い委員長誕生

どうして三木一郎議員のような赤色がかった議員が委員長になれたのだろうか。三木議員の出ている部落の部落会長で、三木氏と地類の三木梅之助さんなどは、新聞の地方版の片すみにのる町会新役員名簿の中に三木一郎という名前がはいっているのを見て、

「へエッ、おどろいた。一ちゃんのような赤でも委員長になれるものかのん。一ちゃんもだいぶ金をばらまいたにちがいない。あんまり金をつかってしまうと、次の選挙の運動費が不足してしまうで、こんど出会ったら、一ちょう諫言(かんげん)してやらにゃならん」と、部落役員会で正式に発言したほどである。

むろん、三木議員が町会の委員長になれたのは、議員生活第四年目だったことと土木産業委員会に所属したことのためで、金をばらまいたわけではなかったにちがいない。

この町の町議会は定員三〇名で、一〇名ずつが総務、厚生、土木産業の三つの常任委員会のどれかに配置される。町会議長と副議長も、一応、どこかの委員会に属さなくてはならない。もちろん、三つの委員会には、それぞれの委員長と副委員長とがある。といっても、副委員長は、委員長欠席の場合に、委員会を司会することになってはいるけれど、委員会は委員長の都合のいい日に招集されるから、代理をつとめることなど、めったに起こらない。役場の課長たちも、重要な問題があれば、あら

かじめ委員長の了解を求めるのがふつうだが、副委員長には何のあいさつもしない。議会の運営も、たいてい議長、副議長および三委員長の協議によっておこなわれるが、副委員長には相談一つかけられない。つまり副委員長は、名前だけで、実質は平議員とことならない。関係課長たちも、委員長には、お中元やお歳暮をとどけるけれど、副委員長にはそういうことをしない。まったく、あれどなきがごとき役ではないか。

だから委員長は議会では議長に次ぐ実力者ということになる。ところが、悲しいことに、委員会は三つしかないから、委員長の椅子も三人分しかない。ときどき、休憩の際に、まじめに、

「どんなもんだいのん、委員会を五つにふやしては？」

と、町長に質問する議員もある。が、町長は総務課長とこそこそ耳打ちしたのち、残念そうな表情で、

「まことに名論卓説とは存じまするが、地方自治法にてらしてみますと、なかなかむずかしいようでございます。不可能とは申せませんが、至難のわざとおもわれますです。なお、当局といたしましては、今後とも十二分に研究したうえで善処いたしたく存じます」

と、ていちょうに答えるのがつねである。

そこで議会側では、いろいろ知恵をしぼった結果、委員長は任期一年、議員の任期四年間、再任をゆるさず、という申し合せをした。三人で四年だから、一二人が委員長になれる。がしかし三〇人中の一二人だから、依然として狭き門であった。

三木議員みたいに、大学は出たけれど、レッドパージで高校の教壇から追われて郷里で鶏飼いを、

それも細君まかせで、やっている赤い人物には、全議員のねらいの的である委員長の椅子がまわってこなくても、あたりまえであったろう。現に、三木議員からしょっちゅういじめられている長井町長のごときは、四年目の委員長改選の際、「三木君のような赤が委員長になったら、県や国からの補助金や起債がいっさいとまってしまう。あぶない、あぶない」と、首をすくめて、しきりにけん制したものである。にもかかわらず、三木一郎議員が土木産業委員長になってしまったのはどうしたことだろう。

*

委員長になるには、金をばらまくというのか一ぱい飲ませるというのか、ともかく買収供応も一方法でなくはない。が毎年、委員会そのものの改組が行なわれるから、どの議員がどの委員会に属するかは、地区や小学校校区その他の関係で当日まで、顔ぶれは決定しない。議員三〇名に木戸屋や丸上で飲ませたら、最低四、五万は覚悟しなくてはなるまい。委員長になっても、委員長手当がつくわけではないから、どんな名誉欲の強い議員でも五万の金をつかうだけの値打ちはないと思っている。でも一万円か一万五千円で委員長になれるものなら、なってみたい。

二年目の厚生委員長になった石川議員は、いい手を使った。というのは石川議員は、委員会改選の二、三日前から、町会で一番声の大きい渡辺銀三議員を木戸屋に誘った。むろん芸妓も入れて二晩ほど騒いだ。その結果だろう、銀三議員は、改選の朝っぱらから、「おれは今年は厚生委員だ。ほかの委員会はぜったいおことわり」としわがれた蛮声を張りあげてまわった。そのどら声にはだれもかなわ

ない。
「銀ちゃんは厚生だのん」
と、まっさきに銀三議員は厚生委員会に割り当てられた。続いて石川議員も厚生入りが決まる。こうして委員の顔ぶれが決まって、正副委員長選任のために別室にはいったかはいらないかに、銀三議員がいきなり、
「委員長は石川君だぞお、反対がありますかあ」
とわめいた。委員長をねらっていた他の議員たちも、公式に名前が発表されてしまっては、正面から反対できない。おたがいに顔を見あわせてブツブツつぶやくきりだった。
「石川君が、われわれの委員長にふさわしくない無能で、ばかもんだと思う方がいたら、反対して下さい。反対ありませんね。では、厚生委員長石川弘君に決定！」
と銀三議員がどなった。一同がポカンと口をあいているうちに、石川弘委員長ができあがってしまった。木戸屋二晩の支払いが一万八千五百余円だったから、委員長の相場は一万八千円ということになった。――ちなみに町会議員の月給は、そのころ六千円だった。
また、三百頭も豚を飼っている吉田喜代志議員は、改選の前の晩、おっちょこちょいのブローカー沢村議員を丸上に呼んで、「委員長にしてくれたら、豚を一頭おごるでな、たのむ、たのむ」とたのんだ。そして、やはり沢村議員とおなじ総務委員会に割り込んで、別室にまっさきに入ると、さっそくテーブルの上に両手をついて平伏した。
「どうか、この吉田を委員長におねがいいたします。どうか、吉田喜代志を男にしてください」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

吉田議員につづいて室に入っていった沢村議員が、
「よかろう、吉田を委員長にせまいか。豚を一頭おごるげな」
と賛成の手をあげた。他の議員は、反対するひまがなかった。それどころか、おくれた四人の委員はまだ室に入ってもいなかった。その四人が委員会室に足をふみいれたときにはすでに吉田委員長が手をついたまま、
「この吉田を男にしていただきまして、ありがとうございました。不肖吉田喜代志、粉骨砕心、一意専心、当委員会のために働くものであります。ありがとうございました」
と、謝辞を繰り返している最中だったから今さら反対もできなかった。もっとも豚一頭をおごるという約束は履行されなかったらしい。沢村議員が追及すると、吉田委員長は、
「供応や買収は選挙違反になるでな。それに、もう委員長になってしまった以上、今さら自分の飼っておる豚を殺すのもむごいな。そういえば、丸上から勘定をとりにきたが、割り勘で、議員報酬から差し引くように収入役に頼んでおいたぜ、悪く思うなよ」
と、答えた。つまり、吉田議員は、ただで委員長になることができたのである。

*

三木一郎議員は、そのどちらでもなかった。第一には、土木産業委員会だから、委員長になれた。といっても、三木議員が、道路学や農業の権威だからというわけではなく、町会の三委員会のなかで、この委員会が最も人気がなかったという意味にほかならない。

じつは、新町会が成立した最初の委員会編成の際、新町会議員の八割以上が土木産業委員会入りを希望した。町会議員になったからには、出身部落の町道を拡幅改良したり、橋をコンクリートに建て変えたり、堤防を築いたりするほどはなばなしいことはない。そうすれば、政治力のあることも地元に認められるだろう。だが、そのためには、まず何よりも道や橋や堤防を管轄する土木委員会入りしなくちゃ。

二〇余名が一〇名の定員を争って、口論から腕力沙汰におよびそうになった。数時間のごたごたのすえ、土木委員会からはみだした議員たちは、総務委員会に殺到した。この委員会には、小学校や中学校が属しているからだ。総務委員なら、学校へ行ったとき、校長以下先生たちが総出で出迎え、きそってスリッパをそろえてくれる。

だが厚生委員会は、やれ病人、やれ死人、やれくそ小便とろくなものは相手にしていないから、ほとんど一人の志望者もなかった。自分から「おれがゆこうか」といいだしたのは、三木議員一人きりだった。一〇名の定員を満たすのに、何時間もおどしたりすかしたりしなければならなかった。

ところが一年たってみると、厚生委員会が一ばんいいことがわかった。というのは、この委員会には、屎尿車や焼場のほかに、国民健康保険あり、屠畜場あり、保育園あり、母子センターあり、簡易水道もある。国民健康保険組合は、特別会計で、一億円の予算を抱えている（町の予算がたった一億七千万円だったのに）。だから、国保審議会委員になれば、しょっちゅう木戸屋や丸上で一ぱいやれる。屠畜場も一年一回は、肉屋のおごりで丸上かビクターで盛大な供養が行なわれるし、簡易水道も新規工事があれば、起工式、竣工式に厚生委員が招待される。保育園も母子センターも、けっして厚生委

員を酒さかななしでは迎えない。厚生委員は一年中よいどきげんだった。

総務委員会もまんざらではなかった。小学校の建築が各校区競争で行なわれたからやはり建築委員として、建設委員会発会式、入札祝、地鎮祭、上棟式、中間検査、竣工祝等々、一ぱいありつくチャンスにめぐまれていたのである。

ところが土木産業委員会には、何もなかった。だいたい、町事業費の大部分は、学校建築にとられてしまって、道路費はわずか四百万円、そのうち二百五十万円は道路維持費で、新規事業費はたった百五十万。それを二十三の部落に分けるのだから、平均六万円あまり。六万円でどれだけの道の改良ができるだろう。木造の橋一つ架けられないではないか。どんな政治家も、この予算の枠内では、実力のふるいようがなかったにちがいない。

予算数百万円から数千万円もかかる海岸堤防や林道や河川の砂防工事も土木委員会の所管に属していたけれど、林道費は国庫補助が山持ちに素通りしてゆくだけだったし、海岸堤防や砂防工事は、名義は町の工事になっていても、費用の大部分が国や県から出ているので、何百万、何千万の工事の入札にも、委員長一人が立ち会って、あとでするめと冷酒、カツ丼一ぱいのごちそうにあずかるだけで、他の委員には何のご利益もなかった。竣工式にも県や国の役人ばかりで町会からは委員長一人が招待されるだけだった。

それでは、産業の方面で、何か権威があったか、といえば、商店は商工会が握り、百姓は農協が牛耳っており、農業技術のことなら、県の指導員がついている。水産については、漁業協同組合がおさえていて、町会議員が口をさしはさむ余地はない。土木産業委員会というのは、一たい何をするとこ

ろだろう。何よりも、一年間一度もごちそうにあずかったことがないではないか。たまに折詰め料理で一ぱいやれるのは、小学校の竣工式だけだったが、これは総務委員会のお情をこうむっているのにすぎない。

このようにして、はじめはけんかずくで押し込んだ土木産業委員会も、二年目以後は、希望者皆無になってしまった。四年目に三木議員が土木産業委員会に入ったのも、むりやりに押し込まれたのであった。

*

この時も、土木産業委員会入りを尻ごみするものばかりだったので、山口亀之助町会議長をはじめ、今まで委員長を一度つとめたいわば長老格の議員たちが、やむをえず、他の議員のいやがる椅子を引き受けて入ってきた。そのほかに、この委員会に配属されたのは、声が大きいだけの銀三議員とか指物屋の中田議員とか、大百姓だが三年間議場で一言も口をきいたことのない宮本議員とか、一番影のうすい、押しのきかない連中だけだった。

助役室に新しい委員の顔がそろうと、新土木委員の一人である亀之助議長は一人一人を首実検するみたいにながめまわしたあげく、

「おい、三木、きみ、委員長をやってみんか」

といった。元校長の松下議員は元厚生委員長、色の黒い大木議員は前厚生委員長、パイプをくわえた下田七平議員は元総務委員長、でっぷりしたひげづらの丸井議員は前々総務委員長、騎兵下士官みた

いに精悍でいろ黒い山下議員は前土木委員長の居残りというぐあいで、めぼしい議員は、すでに委員長をつとめてしまったから、のんびりタバコをふかしている。銀三議員は押しと声だけで、委員長というわけにはいかん。赤くても黒くても、三木議員ぐらいしか適任者はいなかったにちがいない。それと同時に、議長は、町会で最もうるさい噛みつき屋の三木議員を担ぎあげることで、多少とも風当りをやわらげたい気持もあったかもしれない。それはともかく、議長の名指しで、しかも三木議員自身も、

「そうだな、やってみようかな」

と承諾してしまった以上、もうだれも異議をはさむ余地はない。

「なあ、共産党も（三木議員は「いや、もうおれは共産党は追い出されて、党員じゃねえ、トロッキストというだげな」とさえぎった）なに、追い出されようが、トンマグロになろうが、やっぱし三木、おまえは共産党だ。そいで、たまには、委員長などもやってみるとええ。他人のアラを探して攻撃するばかしが能じゃねえ。のん、松下先生」

「そのとおりだのん、議長さん」と、元小学校長の松下議員がのんびり答えた、「一郎君も、一ぺん役につけば何ごとも理想どおりにゃいかんことがわかって、勉強になりますわ」

「ちっとは、おとなしくなるかいのう」と、あまり三木委員長案に乗り気でないらしい山下議員がつぶやいた。

しかしだれよりも不満そうな顔をしたのは、指物屋の中田議員だった。中田議員は、地元のF小学校建築が始まるので、総務委員会に居座ろうとさいごまでがんばった。次の選挙のとき、おれが小学

校を建てたと宣伝できるからであった。金もうけはうまいそうだが、吃りでしゃべることのへたな中田屋さんは、作業中とんだグラインダーの破片で左の目を失って義眼をはめている。興奮すると、眼鏡の底から左目は動かさず、右の目だけをやたらにパチパチとしばだたくのがくせだが、今日はおしまいまで片目から涙を流して、総務委員会残留を主張した。中田屋さんにしてはめずらしいねばりだった。が、とうとう他の連中が口をそろえて、「土木産業へゆけば、前委員長ばかりだから、委員長になれること、うけあいだぜ。四年間議員をやったら、一回ぐらい委員長をやらにゃ、地元のもんに笑われるぞ。総務にゃ、つわものがそろっとるで、万に一つも委員長になれる見込みはねえ。土木はええぜ。人物は三木さん一人だが、赤を委員長に推すやつはだれもおらん。委員長は、中田君、おまえのところへひとりでころがりこんでくる。たなぼた式とは、おまえのことだ」と説得につとめた。それで中田議員も土木産業入りを決心したのであった。

三木議員が「それじゃ、委員長をやらしてもらいます」と挨拶すると、中田議員は、鯉がふを食おうとするみたいに口をパクパクさせたが、声にはならなかった。

「じゃ、中田屋さんに副委員長をおねがいします」

と、三木委員長が発言すると、中田議員は、ひたいの汗をふきながら、

「ハア、わしみたいなふつつかなもんでも……」と、答えるのがやっとのことだった。

*

委員長就任の最初の仕事は、新委員会の懇親会の席をとることであった。定員がそろうのに手間ど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com